

五穀豊穰を感謝し 新春に献米奉告祭齋行

去る一月十三日、午前十一時より本殿にて、新春恒例の献米奉告祭が厳肅に斎行され、引き続き齋館にて鏡開きが盛大に執り行われた。

この献米奉告祭は、旧年末に宗像市部の方より御奉納戴いた新米を御神前にお供えし、昨年の春季大祭に五穀豊穰を祈念して、秋には五穀を豊かに実らせて戴いた神恩に感謝するとともに、この新しい年の五穀豊穣・無病息災・年内安全等を御祈念申し上げるお祭である。

当日は一段と寒さが厳しくなってきたが氏子会長を始め、遠近より数多くの氏子宗



大島の成人式と還暦賀



大島村は人口約一千二百人、三百六十世帯の大半が漁業を営んでいる。この島でも過疎化が進んでいるが、村の行政はこの現状をくい止めるべく懸命に努力されている様である。さて、全国各地に職場を求めて島を後にした人々は、郷里で新しい年を迎える為、磯の香りもみ入る大島に帰って来る。連絡船は星船の客で満船となり、この時期島の人口は一挙にふくれあがるが、寒い正月も盛沢山の土産話で暖まる。

大島では還暦賀を除いて、同年講の集いは全て正月二日に行われるのが慣例

感謝状並に記念品が贈呈された。

引き続き齋館直々々々場にて氏子総代外崇敬者多数参加の下、恒例の鏡開きが盛大に執り行われた。

正月に氏子の方より神前に奉納された約千個のお餅が、雑煮やせんざいとして振舞われ、参加者一同つつみ打ちながら和やかな歓談のうちに散会した。

沖津宮に太鼓を奉納

三島大明神大島分祠の
土屋美喜枝・王好治さん

二月十日、当社拝殿に於て沖津宮太鼓奉納祭が執り行われた。

当社沖津宮は、玄界灘の孤島に鎮座しており、全島年間潮風に曝されている。



一方、寅年同様の還暦賀が十一日、賑やかに行われた。

男女合わせて三十三名の善男善女がこのお祝いに参加、大島全戸に紅白の鏡餅を配布、当日は街中で御酒をふるまい、餅をまく等大変な盛り上がりであった。

このお祭りに使用した餅米七俵は全て、田植祈願祭が斎行された。

拝殿前で記念撮影の後、中村村長のあいさつ、河辺議長、目原教育長の祝辞に続いて一人一人に記念品が贈呈された。

祝賀会に入って、新成人を祝福し、今後の活躍を激励した。

白煙！ 自衛消防団出動！！

文化財防火デー(防火訓練)

一月二十三日午前十時より、当社自衛消防団と玄海町消防団第一分団による合同防火訓練が行われた。この訓練は毎年一月二十六日の文化財防火デーに先だち行われる。

昭和二十四年一月二十六日、奈良法隆寺の障壁画が



修復中に outbreak した事故があった。又翌二十五年には京都の金閣寺が全焼と云う不祥事が相次いだ。この様に国の文化財が火災によって焼失するのを防ぐ為、

神宮がハカマのモダチを取り消火器具手に現場に走り、巫女がバケツリで初期消火体制に入る、境内各所の消火器よりホースをのび、水しぶきの中を各自防火体制にもつき責任場所に着く、この間約五分、玄海町消防団、第一分

式内社顕彰会九州支部結成さる

昭和六十一年十二月の歳の末におこせまつた十三日、当社お使館に於て、式内社顕彰会九州支部の結成式が行われた。

式内社顕彰会とは、全国の延喜式内社三三三社の顕彰を行おうという財団法人で、現在全国各地に支部あり、(東海、山陽、近畿支部)の高揚等に努力し、由緒

旧正月祭・大漁祈願祭

生活と密着したおまつり

去る二月九日、筑前大島に鎮座する宗像大社中津宮者多数参列し、神前に海の幸が献げられ、修被、祝詞奉書、玉串拝礼とつぎ、大漁を奏し、大漁を願う敬虔なる祈りが捧げられた。

祭典終了後、拝殿に於て魚、献品を幾度となくされ、感謝状と記念品が贈呈された。

宮吉丸(福崎博文)
福博丸(福崎博文)
正吉丸(原政人)
欽盛丸(西河欽二)
春日丸組
宮地丸組
沖栄水産



調査し、地元氏子の方々に御神徳と由緒を明らかにし、知らしめようと、九州全県より式内社の宮司を始め関係者が一同に会したのである。当日は全国式内社調理事務局長の美沼男氏、神社本庁調査部長の光儀顕彰会常任理事の出席の下、二十五年度より進められるが、九州神社の朗報と、今後の支部活動がまされる。

支部活動がまされる。

海に押し直会が催された。まずはじめに、遠藤組合長が挨拶の中で現在行われている大島漁港の整備工事等の説明を行い、河辺議長等の乾杯の音頭により祝宴に移り盛会裡に終了した。

尚この時、表彰された方は次の通りである。

(敬称略、順不同)

豊丸(豊福正人)
福博丸(福崎博文)
宮吉丸(福崎博文)
正吉丸(原政人)
欽盛丸(西河欽二)
春日丸組
宮地丸組
沖栄水産

以上

宗像大社歌会
俳句作品集(三)

香椎 板矢クニコ
新春や八十路の祝をたまたわりて

田熊 安部 ゆき
白雲はかそかにゆれて初まり

鐘崎 岩頼 辰夫
寅の歳素直に歩けと妻が杖

津屋崎 井浦 良介
神苑にあたたかき雪舞い落ちる

津屋崎 西住喜三郎
淑気満つ海に向かえばおもえぬ

福岡中央 力丸玄風
伸ぶ日脚冷く浴びて船の旅

藤沢 井上 玄洋
庭の木の揺れる葉末に春兆す

田熊 力丸 一郎
雪簾四塚山の近く見ゆ

福岡 広渡一寿軒
猫のような虎爆笑の春満たせ

大井 吉田 杏子
驚翔ちてもとの静寂大枯野



(続)



5

いしいただし



かえている像が建っている。車待つ間、背の低いヤシの木陰で陽を浴びた。風は強く、この地はフィリピンでも、このほかに気温が高くなる場所はない。ダバオで忘れてならないのは、日本人の移民が最初に入ったところ、一九〇六年(明治三九)のことである。アバカ麻とココヤシの栽培に従事し、一九三〇年代には二万人の日本人がこの地に住んでいたという。ホテルに着いて、昼食は町のレストランです。そのレストランに行く途中、果物店が目についた。店のぞくと、マンゴー、バナナ、ココヤシ、ケガキ等が置いてある。ドリアンは値段が二五ペソから五〇ペソ程度(一ペソは約三〇円)であった。ドリアンは多くのホテルで強烈な臭気を放つため、持込みを禁止しているが、我がが宿泊したアポ・ビュ

八月二日、サンボアンから飛行機で約五五分、フィリピン第二の都市ダバオへ。機内のアナウンスがダバオに着く事告げる。機窓から下を見ると、ココヤシが規則正しく植えられている。ココヤシは「生命の木」と呼ばれるほど、生活に重要な役割を果たしている。ここからパンガという発動機船で海へ出る。陸上に近いところは薄汚い海も沖へ出て、美しい藍色と変わっていった。日本の貨物船が一隻、国籍が分からなかったがもう一隻、停泊していた。沖へ出ると、ココヤシやバナナの幹や皮が流れて行

古代史探訪 (14)

宗像族の墓域を追う (五)

津屋崎古墳群(2) 津屋崎町一帯

石室内に二本の支柱を有する「屍床(ししゆ)」を有する「津屋崎古墳群(勝浦字井ノ浦)」の墳墓を追う。奥の石柱の足元には、奥壁と平行させて、柱状の石を両側壁まで渡してあり、石室との仕切りとして、この仕切り内は、桜古墳の「石室(いしやかた)」と同様に、死者を安置

沖津宮奉仕の思い出 (3)

元宗像神社主典 阿部 吉康氏

愛媛県越智郡在住

これら漂流物を見ると、海に帯状になって、流れている。特にココヤシの漂流物が多い。青い(緑色)のものや、既に外皮果の剥けたものや、半分に割れたもの、三つぐらいに割ったもの、内果皮をとり去ったもの等が見られる。日本の海を漂っているビニールや発泡スチロールやプラスチック等がないのは気が持たない。サマル島の手の前の小島は全島、ココヤシが栽培され、海岸近くにはニッパシが家の隅に小積まれていた。青いココヤシの一個をとって、先端を切った。その切った部分で飲む。喉が干いたので大変うまかった。満洲の貝の採集は出来な